

人生を拓く

③

室岡 敏雄さん (93)
あきさん (85)

北町2丁目

結婚は敏雄さん33歳、あきさん26歳の時。町内の精米所で働いていた時、近所の酒屋のおじさんが人柄を見込んで縁談を勧めてくれたのです。

東川生まれのあきさんは、小学校4年生の時に顔面にフットボールを強打され、音の方向が分かる程度しか両耳が聞こえなくなりました。今はまったく聞こえていません。

4年生の時以来、教育らしい教育を受けていません。「文字も料理も、編み物も洋裁もミシンも、ぜんぶ父さんに教えてもらった」。

敏雄さんからさまざまな知識を教わったそうです。「父さんはワシにはもったいない。気品があつて学問もあるし、心も広い人」。何度も何度もそう強調する自慢の夫です。

敏雄さんは埼玉県出身。終戦混乱期の1947(昭和22)年、復員後の職業紹介所でやっと炭鉱員の職を見つけて夕張へ。その後友人を頼って東川の精米所に勤めました。この時31歳になっていました。

太平洋戦争の開戦2日後に21歳で招集を受けて入隊。終戦まで4年間、北支戦線(中国東北部)などを転戦し、マラリアにかかって終戦を迎えました。激動の戦時下、戦後混乱期を生き抜き、東川に着いた時、入隊から



ちようど10年
が経つていま
した。

家庭の事情で尋常小学校しか出ていません。しかし10代のころから国内外の文学書、哲学専門書などを読み込む文学少年だったそうです。炭鉱時代は「職場詩人」と言われ、新聞機関誌に次々と投稿して懸賞金もずいぶん稼いだそうです。

80歳を過ぎて独学でパソコン操作、DTP(パソコン編集)の知識を学び、編集デザイン力は本格派。自らの半生記を1冊200ページ以上の8分冊に分けて完成させたほどです。

戦後を夫唱婦随で支え合ってきました。「結婚3日目からスコップ担いであちこち作業員仕事に行った」という新婚生活。1959(昭和34)年の伊勢湾台風被害の倒木切り出しで営林署勤めを始め、作業員として8年間各地の山々で働きました。

暮らしが落ち着いていたのは、東川町内の木工所に勤め始めた41歳ころから。50歳でボイラー技士免許、60歳を過ぎて危険物取り扱い資格を取得し、90歳まで新聞配達も続けた努力家でもあります。

俳句

声出せぬ馬の目に蠅とびまわる
遊んでもまだまだ遠い夏至の夜
かき氷食めば顛顛痛むなり
駄菓子屋に夕焼ひとつ買いにゆく
夫の留守のんびり友と氷水
夕餉どき蠅一匹と知恵くらべ
縁日のはだか電球かき氷
軒先にゆれるや去年の氷旗
干草やねころびて見る空広し
かき氷話途切れてかきませる
別の名を爪切り草と教えられ
盛りつけはふわっと押さえてかき氷
桐箱の身動きできぬさくらんぼ
おしやべりの後の沈黙掻き氷
開かれし天の岩戸も立夏なり
暑き夜やひとときの涼星あそび
庭越しに何処も早起き日々草
告白は余白を残し月涼し

本 田 咲
山 内 みゆ
長 谷 川 きみゑ
小 林 ろぼ
高 橋 公花
杉 山 ひろのり
保 科 なほ
徳 光 吐苦
杉 山 りつ
山 口 佐知子
横 田 則子
若 田 久
高 瀬 潤
石 澤 清宏
澤 田 久美子
松 山 蓉子
三 島 智
若 田 郁

